

学校支援プロジェクト ハンドブック

令和7年度



大学院学校教育研究科専門職学位課程

目 次

《本 文》

1	学校支援プロジェクト科目のねらいと構成	1
2	科目の運営とサポート体制	3
3	学校支援プロジェクトの流れ	4
4	e－b o x の使い方	7
5	情報セキュリティに関する注意	8
6	フィールドワークでのマナー	9
7	危機管理と連絡・相談窓口	12

《連携協力校へのお願い》

1	教職大学院学生の発表資料の確認のお願い	14
---	---------------------	----

《資料編》

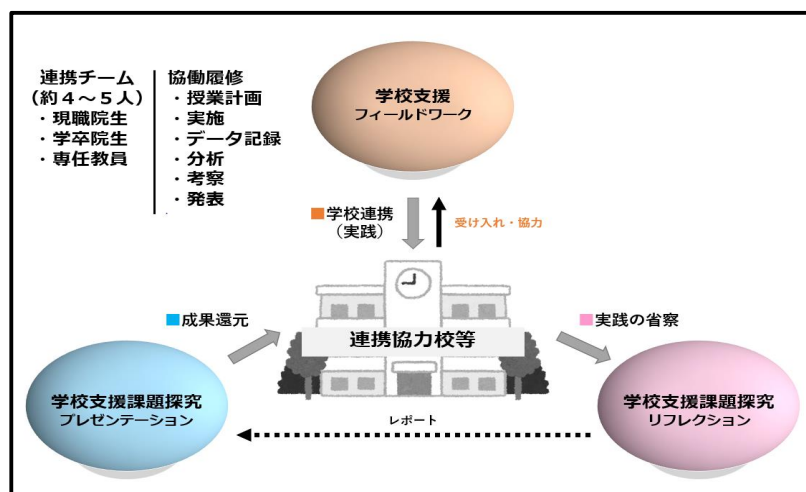
資料 1	学校支援プロジェクト計画書	16
資料 2	学校支援フィールドワーク個別計画表	17
資料 3	『学校支援プロジェクト実践研究』の様式	21
資料 4	学校支援フィールドワーク報告書	23
資料 5	学校支援フィールドワークの総合評価	35

教職大学院における実習について

教職大学院における実習については、中央教育審議会答申等において、学校経営、学級経営、生徒指導、教育課程経営をはじめ学校の教育活動全体について総合的に体験し、考察する機会とする必要があり、また、学部段階における教育実習を通じて得た学校教育活動に関する基礎的な理解の上に、長期間にわたり、教科指導や生徒指導、学級経営等の課題や問題に関し自ら企画・立案した解決策を実験的に体験・経験することにより、自ら学校における課題に主体的に取り組むことのできる資質能力を培うものであることが必要であるとされています。

このため、教職大学院における実習では、学部段階における教育実習をさらに充実・発展し、実践的な指導力の強化を図る観点から、10単位以上、「学校における実習」を含めることとされています。

1 学校支援プロジェクト科目のねらいと構成



学校支援プロジェクトの概念図

本学においては、学校実習を「学校支援フィールドワーク」とし、それと「学校支援課題探究リフレクション」、「学校支援課題探究プレゼンテーション」の2つの科目をあわせて「学校支援プロジェクト」として実施しています。「学校支援プロジェクト」は、リフレクション(実践の省察)とプレゼンテーション(成果の還元)を組み合わせた本学独自の特色あるカリキュラムです。「学校支援(実践)」、「実践の省察」、「成果の還元」という一連の活動を通して、臨床力・協働力を高め、即応力を身につけるというコンセプトです。次頁の表のように現職大学院生と学卒大学院生では科目の構成が異なります。なお、教員としての経験年数や資質を考慮し、審査により学校支援フィールドワークⅠ・Ⅱの履修を一部免除する制度があります。1年制プログラムの履修内容・方法は別に定めています。

また、臨床力、協働力、即応力のコンセプト概念の定義は、次のように考えています。

臨床力

学問知と実践知の動的なバランスを保持する力で、実践のただなかに身を置き、学問知を用いて教育実践の記録・分析を行い、それに基づいて実践知を組み替えていく力（より具体的には、これまで積み上げられてきた臨床的な研究成果、すなわち、臨床的な実態把握や提言を基本的に活用しながら、具体的に教育現場の教育課題を解決する力）

協働力

教員同士はもちろん、保護者や地域の人々など、様々な人々とつながりを持ちつつ課題を解決していく力や、人々の中に協働性を構築する力

即応力

刻々と変わる教育現場の状況を即時に判断し、適切に対応しながら教育実践を展開していく力

代表的な科目の構成

大学院生 (現職教員)	学校支援フィールドワークⅠ(現職) ^{※1}	3単位
	学校支援フィールドワークⅡ(現職) ^{※1}	3単位
	学校支援フィールドワークⅠ(特別)	2単位
	学校支援フィールドワークⅡ(特別)	2単位
	学校支援課題探究リフレクションⅠ ^{※2}	4単位
	学校支援課題探究リフレクションⅡ ^{※2}	4単位
	学校支援課題探究プレゼンテーションⅠ ^{※2}	1単位
	学校支援課題探究プレゼンテーションⅡ ^{※2}	1単位
大学院生 (学部卒業生)	学校支援フィールドワークⅠ(ストレート)	5単位
	学校支援フィールドワークⅡ(ストレート)	5単位
	学校支援課題探究リフレクションⅠ ^{※2}	4単位
	学校支援課題探究リフレクションⅡ ^{※2}	4単位
	学校支援課題探究プレゼンテーションⅠ ^{※2}	1単位
	学校支援課題探究プレゼンテーションⅡ ^{※2}	1単位

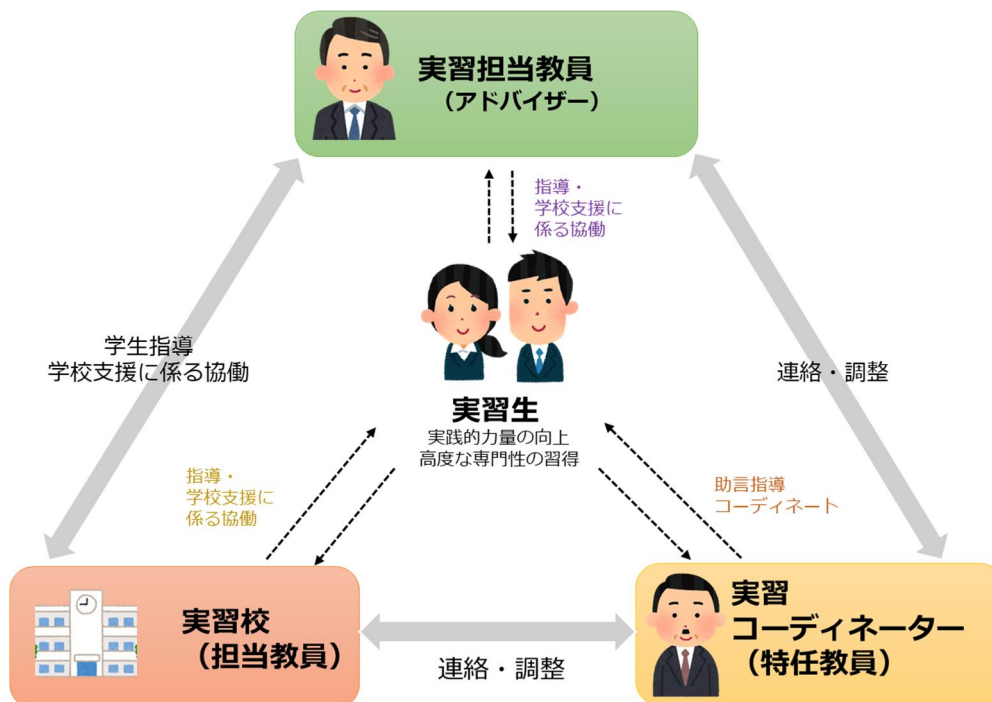
※1 教員としての経験年数や資質を考慮し、審査により免除となる科目です。

※2 コース等により、名称と単位数が異なります。

2 科目の運営とサポート体制

教職大学院では、実習担当教員（専任教員）をアドバイザーと言います。

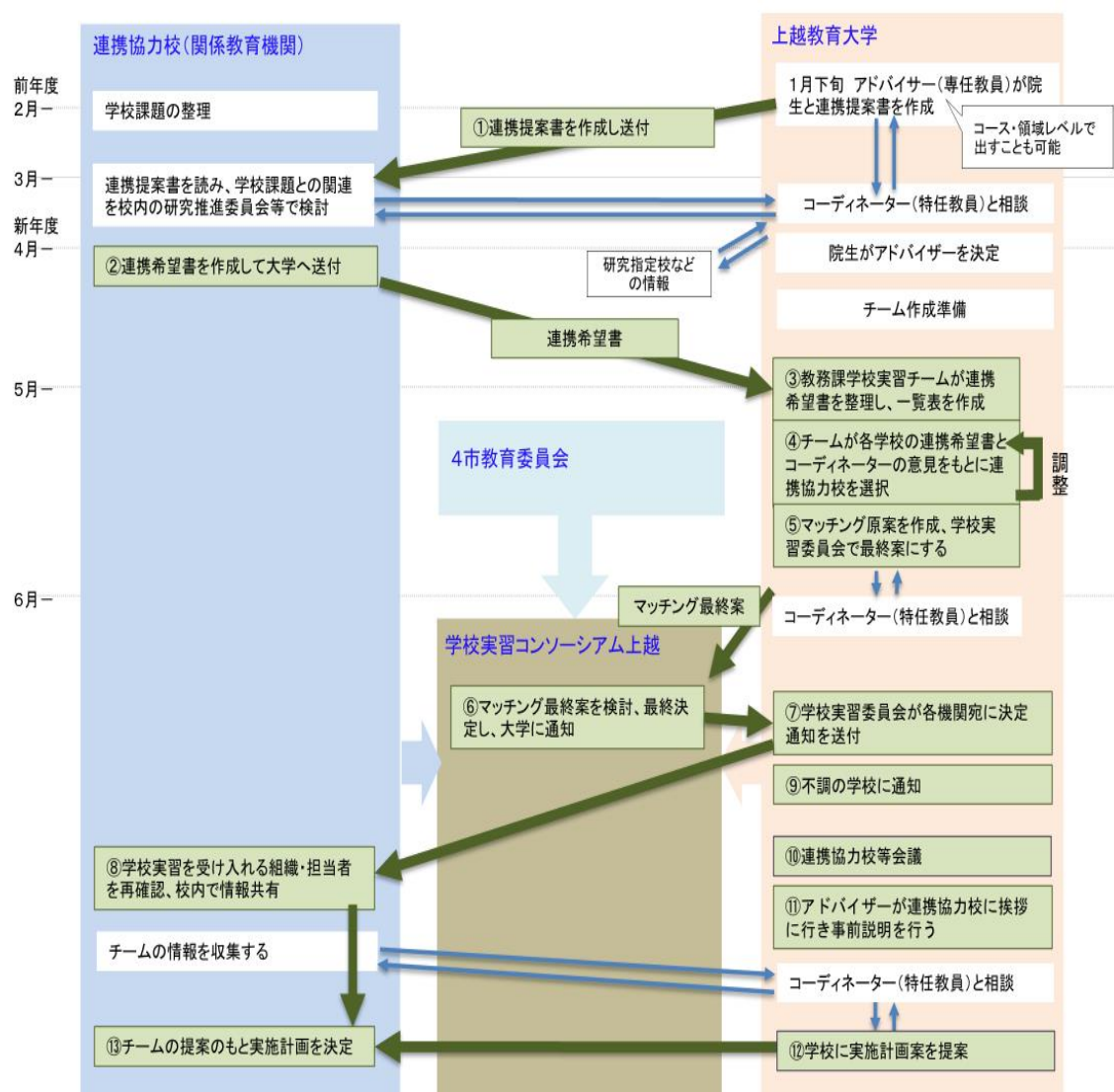
科目の運営は、それぞれの学生が選んだアドバイザーの指導のもとに、主に同じアドバイザー担当院生の連携チームごとに行います。その活動をコーディネーターの特任教員が支えています。



3 学校支援プロジェクトの流れ

(1) 連携協力校等決定までのプロセス

専門職学位課程(教職大学院)のマッチングの流れが下記の図のようになります。



- ① 連携提案書 … 学校に対して何ができるか大学院からの提案を示す書類
- ② 連携希望書 … 大学に対してどのような連携を希望するか学校が示す書類
- ③～⑤ 大学内でのマッチング作業 … 図示したような流れになります。
- ⑥ 学校実習コンソーシアム上越 … マッチングの最終決定を行います。
- ⑦～⑪ 実習までの大学と学校との具体的な連絡
- ⑫～⑬ 実施計画書 … 学校実習を展開する具体的な実施計画を記した書類

(2) 連携チームの構成について

- ① アドバイザーは、各連携協力校等に院生を配属し、連携チームを編成する。
- ② 一人のアドバイザーに所属する院生数に応じ、アドバイザーと院生一人から複数人でチームを編成する。そのため、連携チームが複数になることもある。また、所属院生が少ない場合は、複数の連携チームで「リフレクション」、「プレゼンテーション」を行い、協働の場を担保する。
- ③ 学校現場の多様な課題に応じて、複数のアドバイザーが連携チームを担当することがある。
- ④ 現職のみやストレートのみのチームができた場合も複数のチームでの連携を図る。
- ⑤ 基本的に連携協力校等が決まってからのアドバイザーの変更は認められないが、合理的な理由がある場合には、所属のコース等の議を経て認めることがある。

(3) 令和7年度学校支援プロジェクト年間計画

時 期	大 学	アドバイザー 活動内容	大学院生 活動内容
4月		新入生に学校支援プロジェクトの概要を説明	
4月18日(金)	学校現場から提出された「連携希望書」を集約		
5月～ 6月初旬	連携協力校の決定 (マッチング)	連携可否の検討後、教務課へ回答	
5月23日(金)	学校実習委員会 (仮決定)		
6月 第1週	学校実習コンソーシアム上越企画運営委員会 (決定)		
6月11日(水)	学校実習連携協力校等会議		
実習開始前		アドバイザーと学生は、連携協力校等を訪問し、具体的な活動内容等について協議	
6月～8月		チームで「学校支援プロジェクト計画書」を作成	
		アドバイザーは「学校支援プロジェクト計画書」を教務課へ提出	各学生は「学校支援フィールドワーク個別計画表」を作成し、アドバイザーへ提出
随時		学校支援フィールドワーク開始(随時)	
		e-boxの「活動記録」やリフレクションを通じて、チームや個々の学生を指導	各学生はe-boxに「活動記録」を入力
8月～12月		適宜リフレクションを実施	
12月	次年度用「連携提案書」の作成依頼	次年度用「連携提案書」作成	
12月～ 2月上旬		・チームで『学校支援プロジェクト実践研究』の原稿を作成 ・『学校支援プロジェクト実践研究』の原稿は連携協力校等の確認を得て、教務課へアドバイザーが提出	
1月23日(金)		「連携提案書」を教務課へ提出	
2月中		学校支援プロジェクト成果発表(個別) 2月13日(金) 学校支援プロジェクトセミナー(成果発表全体会)	
2月上旬～ 2月中旬			各学生は「学校支援フィールドワーク報告書」を作成し、アドバイザーへ提出
		・「学校支援フィールドワーク報告書」に基づき「学校支援フィールドワークの総合評価」を作成し、実習関連(リフレクション・プレゼンテーション)科目とともに成績評価として教務課へ提出 ・評価後、「学校支援フィールドワーク報告書」を学生へ返却	

4 e-box の使い方

(1) e-boxとは

上越教育大学大学院におけるデジタルティーチングポートフォリオシステムである。フィールドワークの活動記録を蓄積する。記録は、大学内のサーバに保存される。

(2) 利用目的

- ① 活動記録を蓄積し、実習日誌とする。
- ② 日々の活動記録を振り返り、リフレクションやプレゼンテーションに利用する。
- ③ 次年度以降の院生に活動報告等を公開し、実習の参考にする。

(3) 利用方法

- ① 入力用 PC
 - i 各自の PC を利用し、学内や自宅からインターネットに接続して利用する。
 - ii 連携協力校等では、PC をインターネットに接続しない。
- ② 利用開始手順
 - i JUEN 認証サイトへログインする。
<https://portal.myjuen.jp/>
 - ii メニュー（コンテンツの一覧）から e-box を選択すると、トップページが表示される。
 - iii 「実習日誌」に入力する前にまず、「実習シート」に基本データ（実習期間や実習校名）を登録する。
 - iv 日々の活動記録を「実習日誌」に入力する。
 - v 操作方法の詳細は、操作マニュアル（ログイン後の「お知らせ」から閲覧可能）を参照すること。
- ③ 記録の公開
記録の公開
 - i 大学教員及び院生に限定する。ただし、学校長等からの要望があれば、学校等内に限定して公開する。
 - ii 記録は、個人情報等に十分配慮する。記述に当たっては、個人の氏名等の個人情報に特定できないように記述する。（氏名はイニシャル等で表記するなど）

(4) 日々の活動記録（日誌）

- ① 実習日誌及び出席簿を兼ねるため、日誌とする箇所は公式文書扱いとする。
- ② 当該院生の修了後 5 年程度は保存し、その後は削除する。
- ③ 相互閲覧機能及びコメント機能を利用し、アドバイス等の記入が可能である。
- ④ 実習期間（日）以外の記録も可能とする。ただし、印刷の段階では非公式な記録は、実習先を「その他」と選択する。

5 情報セキュリティに関する注意

(1) 連携協力校等との取り決め

- ① 校内のネットワークに接続しない。
- ② 教職大学院関連の周辺機器（USB 等）を連携協力校等の P C 等の情報端末に接続する場合は、連携協力校等の職員がチェックを行う。
- ③ 上記に異常がある場合は、速やかにアドバイザーに報告する。
- ④ 上記にかかわらず、大学はセキュリティ向上に努めるとともに、本ルールを遵守した上で発生したトラブルについては、大学が責任を負う。

(2) 院生のルール

- ① 大学及び連携協力校等に持ち込まれる全ての機器、又は、そこに設置される機器・ネットに接続、若しくは、接続する可能性のある全ての機器・ネットのセキュリティは、それを管理する個人及びチーム（アドバイザー・院生）の責任とする。
- ② コンピュータには指定ウイルス対策ソフトをインストールし、原則として毎日、更新を行うとともに関連する機器のチェックを行う。上記を行わない機器は、大学及び連携協力校等に持ち込まない。さらに、ファイル交換ソフト等のインストールは行わず、定期的にインストールされていないことを確認する。
- ③ ①の機器は、安全性の確認されない他の機器及びネットに接続しない。
- ④ ①の機器に異常がある場合は、速やかにアドバイザーに報告し、指示を仰ぐ。
- ⑤ 大学及び連携協力校等で扱う情報（個人情報やマル秘情報等）を P C 内蔵のハードディスクに保存してはならない。P C 本体から取り外し機器に保存する場合は、必ずパスワード管理とし、使用目的終了後は、すぐに消去すること。また、紙媒体等の個人情報やマル秘情報等については、必ず鍵のかかる場所等に安全に保管し、使用目的終了後は速やかにシュレッダー処理を行う等、解読不能な状態で廃棄する。
- ⑥ 連携協力校等へファイルを持ち込む際、あるいは、メールにファイル添付する際は、必ずウイルス対策ソフトでチェックをし、安全性が確認されてからとする。
- ⑦ 写真やビデオで撮影する場合は、学級担任等に事前に話し、撮影してはいけない人物について確認をしておく。
- ⑧ 学校支援プロジェクトに関わることを SNS 等へ書き込むことを禁ずる。

6 フィールドワークでのマナー

学校支援フィールドワークは、学卒院生、現職院生、教職大学院教員が連携協力校と協働して学校課題解決にあたる中で、実践的力量の向上、専門性の習得を図る場である。

このため、連携協力校等では、学卒院生であっても、教育職員免許状を所有する「支援してくれる教員」「協働できる教員」という期待をもって受け入れている。この期待に応えるためにも、以下のような事柄について留意が必要である。

《心構え》

(1) 「感謝の気持ち」をもって行動する

- ① 全てのマナーの根源は「感謝の気持ち」。行動の基準とすることが大切である。
- ② 常に教えを乞う姿勢を忘れない。先輩の教員が子どもの成長のために腐心する「教師魂」に学ぶ。
- ③ 連携協力校等の教職員の一員としての気概をもって、教育活動に取り組む。

(2) 情熱と行動力を発揮する

- ① 若い情熱と旺盛な行動力で何事にも積極的に取り組む。多様な取り組みで授業の仕方、子どもとの接し方などを肌で感じ取る。
- ② 全てを前向きに、明るく積極的に捉える。積極的な姿勢が新しい自分の発見、成長につながる。

(3) 融和の心、協調性を大切にする

- ① 学校は、組織体である。教職員各々の立場、違いを尊重する。
- ② 連携協力校等の教職員を尊敬・信頼するとともに、協働の気持ちを忘れない。

(4) 子ども一人一人を尊重し、誠意をもって対応する

- ① 子どもの人権を尊重する。言葉遣い、対し方等十分に留意する。
- ② 子どもとの馴れ合い、迎合は厳に慎む。真の信頼関係は、馴れ合い、迎合からは生まれない。

(5) 授業の準備は万全にし、責任を果たす

- ① 十分な計画と準備、精一杯の取り組みを行う。
- ② 実習授業であっても、子どもにとっては「今の一瞬」。過ぎ去った時間は戻らない。

(6) 服務勤務の厳正さをわきまえる。また、礼儀作法とけじめを身に付ける

- ① 教員としての自覚と責任をもち、必要な服務勤務、礼儀作法やけじめを学ぶ。「挨拶、表情、言葉遣い、身だしなみ、謙虚な態度」はマナーの基本。
- ② 連携協力校の服務規程に沿って、校長の指示に従う。
- ③ 職務上知りえたこと、個人的な情報を口外しない。公務員の守秘義務に準ずる。

《応対の仕方》

（１）挨拶は心を込めて、きちんと行う

- ① 明るく、いつでも、自分から先に、継続して・・・を心がける。
- ② 「会釈、目礼、礼、敬礼」等、場に応じた挨拶を行う。

（２）出勤時、退勤時の挨拶を行う

- ① 出勤時は、さわやかに「おはようございます」、教務室内に管理職がいるときは席の近くで再度挨拶をし、来校している旨を伝える。
- ② 退勤時、先に帰るときは「お先に失礼します」、他の人の「お先に・・・」に対しては、「お疲れ様でした」という。（「ご苦労様でした」は、目下の人に対しての言い方である。）

（３）自己紹介はフルネームです

- ① 姿勢を正し、笑顔でさわやかにする。
- ② きちんと立ち、相手の顔をみて、正対して行う。

（４）電話の応対は、学校の顔という意識で丁寧に行う

- ① 受話器をとったら「はい、□□小学校の学校実習生〇〇（名前）です。」と明るい声で応対する。相手が自分の所属、名前を言わないときは、「どちら様でしょうか」と相手の名前を確認する。
- ② 待たせない、たらいまわしをしない。相手が受話器を置いてから切る。
- ③ メモにとり、要件を確実に把握する。メモには、①相手の所属②相手の名前・連絡先③誰への連絡か④要件⑤電話を受けた日時⑥自分の名前を記録する。必要に応じて、復唱して確認する。

《言葉遣い》

（１）相手を尊重した言葉遣いが基本・・・子どもの人格を尊重する

- ① 「さん」付けが基本。連携協力校等のルールを確認する。
- ② 人権侵害を疑わせるような使い方をしない。差別用語、人権を侵害するような言葉は使用しない。

（２）場に即した言葉遣いをする

- ① 院生同士でも、子どもの前では原則としてお互いに「A先生・・・」「B先生・・・」と呼び合う。（院生であっても子どもにとっては先生）
- ② 保護者、同僚の間では、自分のことは原則的には「私は・・・」と表現する。
- ③ 「うちの学校」「本校では」という。「まえ、よそ」ではなく、今、自分の学校の子どものためにという意識をもつ。
- ④ 日常の言語活動も教育活動の一環、正しい敬語を使用する。

《身だしなみ・服装》

（１）時、場所、状況に合わせた服装が基本である

- ① 出勤・退勤時、授業中、休み時間中、放課後、職員会議、研修会、儀式等、連携協力校等の職員の様子を見ながら対応する。学校の風土、管理職の考え方などで違いがあるので、見極めることが必要である。分からないことは、聞くこと。
- ② 清潔感のある服装、機能的な動きができる服装を心がける。

（２）さわやかで好感もてる外見を心がける。

- ① さわやかさ、清潔感を第一とする。
- ② 化粧は控え目にする。（香水など、匂いのするものはできるだけ避ける。特に化学物質過敏症の子どもが在籍するときは厳禁）
- ③ 染毛は慎む。長い髪は束ねるようにする。

《その他》

- ① 会議、研修、打合せには遅れない。ゆとりをもって行動する。
- ② 提出物は期限厳守で提出する。提出書類は、アドバイザーや連携協力校等の担当者の点検を受け、修正の時間を見込んで作成する。
- ③ 報告・連絡・相談を的確に行う。些細なことも自分勝手に判断しない。連携協力校等の担当職員やアドバイザーに報告、連絡、相談を的確に行う。早め早めの対応が、大事を防ぐ。

7 危機管理と連絡・相談窓口

(1) 災害や事件・事故等発生時の対応

学校支援プロジェクトの活動に伴って、院生がかかわる災害や事件・事故などなどが発生した場合は、大学の危機管理マニュアルに従って対応する。

なお、フィールドワーク中にあっては連携協力校等の危機管理マニュアルに従って対応する。

(2) 事前の防止対策

① 地震、津波、台風等による大規模な自然災害

避難場所や避難経路、連絡体制等を把握し、適切に行動できるようにする。

② 重篤な感染症や大規模な食中毒等の健康危機

毎朝必ず健康チェックを行い、発熱や嘔吐、下痢等感染症の症状がある場合は実習先には行かない。また、感染症の流行期には、体温計とマスクを可能な限り携行し、咳エチケットや頻繁な手洗い等を心がける。

③ 交通事故

交通ルールを遵守し、時間に余裕をもって行動する。なお、自家用自動車を使用する場合は、必ず任意保険に加入する。

④ ハラスメント等の事案

ハラスメント等の被害を受けないよう、節度ある関係を維持するように心がけるとともに、実習の打合せ等は、必ず実習先の学校や機関内で行う。また、自分だけで解決しようとせずに、相談窓口又はアドバイザーに相談をする。

(3) 連絡体制

院生 → ①連携協力校等の教職員

(協力校：教 頭 教頭が不在の場合は、教務主任等教職員へ報告。)

(機 関：担当者 担当者が不在の場合は、在席の職員へ報告。)

※交通事故の場合は、先に消防・警察へ通報し、人命優先とする。

※連携協力校でハラスメント等を受けた場合は、相談窓口又はアドバイザーに相談をする。

↓

②大学のアドバイザー

↓

③学校実習委員会委員長 (必要に応じて → 学校実習委員会 →
学校実習コンソーシアム上越)

(4) 連絡・相談窓口

内容	担当	連絡先
学校実習に関する事務一般	上越教育大学 教務課学校実習チーム (窓口時間 8:30～17:15)	電話 025-521-3276 FAX 025-521-3280 e-mail zissyuu@juen.ac.jp
学校実習に関する問い合わせ	上越教育大学 学校実習・ボランティア支援室 (窓口時間 9:00～16:00)	電話 025-521-3624 FAX 025-521-3255 e-mail svcs@juen.ac.jp
ハラスメントに関する相談窓口	上越教育大学 総務課 (窓口時間 8:30～17:15)	電話 025-521-3228 e-mail stopsh@juen.ac.jp http://www.juen.ac.jp ホーム>大学紹介>公開情報> ハラスメント防止対策

学校実習で生じたトラブルは大学教員（アドバイザー）が担当する。しかし、緊急時や複雑なトラブルなどには、学校実習・ボランティア支援室が、大学教員に連絡をとるとともに、初期対応を実施し、担当部署等に引き継ぐ。

(5) 保険等の適用について

- ① 実習生が実習先との往復中、交通事故を起こした場合
→原則、運転者が加入している保険で対応。
- ② 実習生が実習中、児童生徒等に怪我をさせた場合や学校の備品等を壊した場合
→原則、実習生が加入している学生教育研究賠償責任保険で対応。
- ③ 実習生が実習中、怪我をした場合
→原則、実習生が加入している学生教育研究災害傷害保険で対応。

(6) 服務・勤務

学校実習における実習生は、学校現場においては、学校の服務規程に沿って、校長の指示に従う。

《連携協力校へのお願い》

年 月 日

学校支援プロジェクト連携協力校長 様

上越教育大学大学院教育実践高度化専攻

教職大学院学生の発表資料等の確認のお願い

貴職におかれましては益々ご清祥にお過ごしのこととお喜び申し上げます。

日頃より本専攻の教育活動に対しまして格別のご高配をいただき、誠にありがとうございます。

さて、本学教職大学院のカリキュラムでは、学生・連携チームはその時点での取組や成果等を発表するように計画されております。また、その成果は広く社会に還元するよう文部科学省からも求められているところです。そこで、取組や成果等の発表の場を学内及び学外の教育関係者にも広くご案内することにしております。

つきましては、ご多用の折、誠に恐縮ですが、毎年2月に開催を予定しております「学校支援プロジェクトセミナー」等の発表原稿及び成果報告として作成する『学校支援プロジェクト実践研究』の原稿をご確認のうえ、不適切な点がありましたらご指摘くださるようお願いいたします。

なお、発表原稿等の作成において、本専攻では以下のことを申し合わせておりますので、申し添えます。

- 1) 学校支援プロジェクトが各連携協力校等の課題をもとに、解決することを実習の目的とする。したがって、その発表においては各連携協力校等の課題を扱う。しかし、各校のこれまでの歩みや取組を否定するのではなく、その課題を解決しようとする学校の姿勢と改善成果を強調するようにする。
- 2) 発表内容については、連携協力校の校長等と協議する。特に、個人情報については法令に基づき慎重に取り扱う。
- 3) 発表資料や発表風景等の画像や映像を本専攻・連携チーム内部で記録保存することはあるが、決して外部には出さない。また、それ以外の部外者が記録することを禁止する。
- 4) 学校支援プロジェクトセミナー等の発表時には、発表資料を当日の参加者に配布する。
- 5) 発表原稿等については、内容の整合や個人情報等について、事前に連携協力校から指導を受けるものとする。事前に指導助言を受ける場合は、協力校の負担にならないよう留意する。直接指導を受けるか、メールで指導を受けるかについては、連携協力校と実習生との打ち合わせによる。

資料編（書式等）

資料 1	学校支援プロジェクト計画書（チームで作成）	・・・16
資料 2	学校支援フィールドワーク個別計画表（個人で作成）	
	＊ストレート大学院生用	・・・17-18
	＊現職大学院生用	・・・19-20
資料 3	『学校支援プロジェクト実践研究』の原稿	
	＊原稿の様式	・・・21
	＊原稿の見本	・・・22
資料 4	学校支援フィールドワーク報告書（個人で作成）	
	＊ストレート大学院生用（M1）	・・・23-25
	＊ストレート大学院生用（M2）	・・・26-28
	＊現職大学院生用（M1）	・・・29-31
	＊現職大学院生用（M2）	・・・32-34
資料 5	学校支援フィールドワークの総合評価（アドバイザー作成）	
	＊ストレート大学院生用	・・・35
	＊現職大学院生用	・・・36

※資料は Google ドライブ上に保存されています。適宜ダウンロードのうえ、使用をお願いします。

【保存先】

資料 1～4（大学院生向け）

共有アイテム → [FS] 全学共有 → 16_学校実習関係 → 01_学校支援プロジェクト関係各種様式

資料 1～5（アドバイザー向け）

共有アイテム → [FS] 教職員ファイルライブラリ → ファイルライブラリ → K179 学校実習
→ 各種様式（連携提案書・計画書・報告書など） → 学校支援プロジェクト（計画書・報告書等）

資料 1

令和 6 年度 学校支援プロジェクト計画書

1. 連携チーム

アドバイザー教員 氏名：

院生（学籍番号・氏名）

学籍番号 氏名

学籍番号 氏名

学籍番号 氏名

担当特任教員

2. 連携協力校等

学校等名：

学校長等：

担当者：

3. 連携テーマ

テーマ：

4. 具体的な連携内容の概要

5. フィールドワーク計画

1) 期間 月 日～ 月 日

2) 具体的な院生の業務

3) フィールドワーク時間の割り振り

4) アドバイザーの役割

6. リフレクション計画

7. プレゼンテーション計画

1) 校内プレゼンテーション

2) 公開プレゼンテーション

8. 資料の公開及び形式等

9. 連携にあたって留意すべき事項

10. 他チーム、サポーターとの連携関係

11. その他

学校支援フィールドワーク個別計画表（ストレート院生用）

1 実習生の状況

実 習 生 氏 名		学籍番号	
実 習 生 連 絡 先			
取得済みの教員免許			
取得予定の教員免許			

2 学校支援フィールドワークに参加するための準備状況

1 学校での実習や活動の状況 (M2は昨年度の経験を含む)	
2 その他	

3 実習先および担当者

実 習 期 間（予定）				
実 習 校 名				
学 校 長 名				
実 習 校 住 所 等	〒 住所： TEL： FAX：			
実 習 校 担 当 者				
学 校 規 模	学 級 数		児 童 生 徒 数	
	教 員 数			
教 育 目 標				
重 点 目 標				
特色ある教育活動				
地 域 の 特 色				
そ の 他				

4 実習の主な活動に関する目標

学校課題における目標	(学校課題・学校連携の目的)
	(学校課題に対する実習の目標)
実習者個人の目標 ※1	教科内容・特別活動・生徒指導・進路指導・校務の企画運営等について、臨床力・協働力・即応力の向上を目指した目標

※1…連携校の課題を踏まえて、教職大学院の3つのコンセプトに基づく評価基準を参照し、「実習者の目標」を策定する。（学校支援プロジェクトハンドブック 23～28 ページの自己評価項目を参照。）

5 実習計画

学校課題における計画	◎学校課題に対応する活動・取組の計画
実習者個人の計画	◎教科内容・特別活動・生徒指導・進路指導・校務の企画運営等について、臨床力・協働力・即応力の向上を目指した活動・取組の計画

学校支援フィールドワーク個別計画表（現職大学院生用）

1 実習生の状況

実 習 生 氏 名		学籍番号	
実 習 生 連 絡 先			
取得済みの教員免許			
取得予定の教員免許			

2 学校支援フィールドワークに参加するための準備状況

1 これまでの教育 活動・研究活動 (現職経験において意識 してきた課題や、実習生 の指導経験などを踏まえ て記入。M2は昨年度の経 験を含む。)	
2 その他	

3 実習先および担当者

実 習 期 間 (予定)			
実 習 校 名			
学 校 長 名			
実 習 校 住 所 等	〒 住所 : TEL : FAX :		
実 習 校 担 当 者			
学 校 規 模	学 級 数		児 童 生 徒 数
	教 員 数		
教 育 目 標			
重 点 目 標			
特色ある教育活動			
地 域 の 特 色			
そ の 他			

4 実習の主な活動に関する目標

学校課題における目標	(学校課題・学校連携の目的)
	(学校課題に対する実習の目標)
実習者個人の目標 ※1	教科内容・特別活動・生徒指導・進路指導・校務の企画運営等について、臨床力・協働力・即応力の向上を目指した目標

※1…連携校の課題を踏まえて、教職大学院の3つのコンセプトに基づく評価基準を参照し、「実習者の目標」を策定する。（学校支援プロジェクトハンドブック 29～34 ページの自己評価項目を参照。）

5 実習計画

学校課題における計画	◎学校課題に対応する活動・取組の計画
実習者個人の計画	◎教科内容・特別活動・生徒指導・進路指導・校務の企画運営等について、臨床力・協働力・即応力の向上を目指した活動・取組の計画

『学校支援プロジェクト実践研究』の様式

1 書式

- ① 余白（上下25mm、左右20mm）、各文字サイズは次ページの書式と同一にする。
- ② 文字数および行数は本書式を基本とするが、場合によっては変更して良い。
- ③ A4サイズ
- ④ 原稿は4～6ページとする。
- ⑤ 下部中央にページ番号を振ること。

2 作成について

- ① 複数の連携協力校等と連携しているチームは、原則として連携協力校ごとの作成とする。
なお、連携テーマが関連する内容であって、連携協力校等の許可を受けた場合に限り、併せた作成も可能とする。

3 提出について

- ① 提出前に、原稿について連携協力校等の確認を得る。
- ② 2月上旬の指定する日時までに、アドバイザーを通じて、教務課学校実習チームに提出する。
。
- ③ 提出原稿はPDF形式とし、教務課学校実習チームへメールで送付する。
- ④ ファイル名は連携協力校名とする。
- ⑤ 提出後の原稿修正は受け付けない。

算数授業で「思考力・判断力」をどう育成するか

(↑MSゴシック14ポイント)

上越市立〇〇小学校チーム (←MS明朝12ポイント)

上越 太郎 (M1)

妙高 一郎 (M2)

糸魚川 花子 (M2)

柏崎 上教 (アドバイザー)

要約 (←MSゴシック10.5ポイント)

学校支援の目的は、次の2点である。第1は、
 第2は、
 この結果、以下が明らかになった。
 (←MS明朝10.5ポイント)

キーワード：学び合い、人間関係、意識の変容

I 問題の所在 (←MSゴシック10.5ポイント)

最近の〇〇教育では、基礎基本の定着を図るとともに、主体的に問題解決できる能力が求められている。(←MS明朝10.5ポイント)

〇〇・〇〇(1994)は、〇〇概念を通して〇〇提示における概念変容の研究を行った¹⁾。それによると、事象をうまく〇〇できないときに〇〇的〇〇が生じ、その〇〇のために概念変容が起こると捉えている。つまり、概念〇〇

II 支援の実践 (←MSゴシック10.5ポイント)

1、実態調査 (←MSゴシック10.5ポイント)

質問紙調査およびインタビューにより、支援校の実態を調査した。

引用文献・参考文献

III 考察

1、〇〇

最近の〇〇教育では、基礎基本の定着を図るとともに、主体的に問題解決できる能力が求められ

1) 〇〇・〇〇：「〇〇提示における生徒の概念の変容－〇〇を事例とした〇〇概念に関して－」、
 〇〇学会研究紀要、Vol. 〇〇、1

学校支援フィールドワーク報告書（ストレート大学院生）

【授業科目：学校支援フィールドワークⅠ（ストレート）】

所 属：	
学籍番号：	
氏 名：	
実習校名：	

実 習 期 間	年 月 日～ 年 月 日
実 習 時 間 数	時間

アドバイザー	
--------	--

学校支援フィールドワーク報告書（ストレート院生 M1）

○実習期間： 年 月 日 ～ 年 月 日

○自己評価の基準

A：十分にできている、B：概ねできている、C：あまりできていない、D：ほとんどできていない

※フィールドワーク計画表における目標を確認し、評価を記述すること

1 学校課題解決に対する活動の評価

番号	自己評価項目	自己評価 (A～D)
①	チームの研究課題は、学校の教育課題の十分な理解に基づいて設定されていたか。	
②	研究課題に迫るためのチームの活動計画は、具体的かつ実現可能なものであったか。	
③	チームの活動は、計画を踏まえて適切に実行に移すことができたか。	
④	チームの活動によって、チームの研究課題に迫ることができたか。	
⑤	結果として、チームの活動は、学校の教育課題の解決に寄与することができたか。	
(自己評価の理由・根拠となる事実等の所見)		

2 実習者個人の目標に対する活動の評価

(1) 臨床力

学問知と実践知の動的なバランスを保持する力で、実践のただなかに身を置き、学問知を用いて教育実践の記録・分析を行い、それに基づいて実践知を組み替えていく力

番号	自己評価項目	自己評価 (A～D)
①	実践を主観的・感覚的に見取るのではなく、より客観的・具体的な事実として見取ることができているか。	
②	①のデータを学問知（理論的視点や実践研究の知見）に基づいて適切に解釈・分析・考察等できているか。	
③	②の結果から実践の改善案等を導くことができているか。	
(①～③の項目に対する自己評価の理由、根拠となる事実等の所見)		
④	臨床力に関する課題を明確にできたか。	
(④に対する自己評価の理由、根拠となる事実等の所見)		

(2) 協働力

教員同士、保護者や地域の人々など、様々な人々とつながりを持ちつつ課題を解決していく力や、人々の中に協働性を構築する力

番号	自己評価項目	自己評価 (A～D)
①	チームに参加できているか。	
②	チームの中で役割を自覚し、貢献しているか。	
③	チームをまとめる役割を担い、貢献しているか。	
④	チームと学校の教員、保護者や地域の人々など、様々な人々とつながりを見出し、学校の教育課題の解決に貢献しているか。	
(①～④の項目に対する自己評価の理由、根拠となる事実等の所見)		
⑤	協働力に関する自己の課題を明確にできたか。	
(⑤に対する自己評価の理由、根拠となる事実等の所見)		

(3) 即応力

刻々と変わる教育現場の状況を即時に判断し、適切に対応しながら教育実践を展開していく力

番号	自己評価項目	自己評価 (A～D)
①	フィールドワークを通して自己の実践的課題を自覚できたか。	
②	実践的課題を克服するために何が必要かを認識できているか。	
(①～②の項目に対する自己評価の理由、根拠となる事実等の所見)		
③	即応力に関する課題を明確にできたか。	
(③に対する自己評価の理由、根拠となる事実等の所見)		

学校支援フィールドワーク報告書（ストレート大学院生）

【授業科目：学校支援フィールドワークⅡ（ストレート）】

所 属：
学籍番号：
氏 名：
実習校名：

実 習 期 間	年 月 日～ 年 月 日
実 習 時 間 数	時間

アドバイザー	
--------	--

学校支援フィールドワーク報告書（ストレート院生 M2）

○実習期間： 年 月 日 ～ 年 月 日

○自己評価の基準

A：十分にできている、B：概ねできている、C：あまりできていない、D：ほとんどできていない

※フィールドワーク計画表における目標を確認し、評価を記述すること

1 学校課題解決に対する活動の評価

番号	自己評価項目	自己評価 (A～D)
①	チームの研究課題は、学校の教育課題の十分な理解に基づいて設定されていたか。	
②	研究課題に迫るためのチームの活動計画は、具体的かつ実現可能なものであったか。	
③	チームの活動は、計画を踏まえて適切に実行に移すことができたか。	
④	チームの活動によって、チームの研究課題に迫ることができたか。	
⑤	結果として、チームの活動は、学校の教育課題の解決に寄与することができたか。	
(①～⑤の項目に対する自己評価の理由・根拠となる事実等の所見)		

2 実習者個人の目標に対する活動の評価

(1) 臨床力

学問知と実践知の動的なバランスを保持する力で、実践のただなかに身を置き、学問知を用いて教育実践の記録・分析を行い、それに基づいて実践知を組み替えていく力

番号	自己評価項目	自己評価 (A～D)
①	実践を主観的・感覚的に見取るのではなく、より客観的・具体的な事実として見取ることができているか。	
②	①のデータを学問知（理論的視点や実践研究の知見）に基づいて適切に解釈・分析・考察等できているか。	
③	②の結果から実践の改善案等を導くことができているか。	
④	①、②と③の往還を通して、新たな実践知（新たな理論的視点や実践研究の知見）を見いだすことができているか。	
(①～④の項目に対する自己評価の理由、根拠となる事実等の所見)		
⑤	臨床力に関する課題を改善できたか。	
(⑤に対する自己評価の理由、根拠となる事実等の所見)		

(2) 協働力

教員同士、保護者や地域の人々など、様々な人々とつながりを持ちつつ課題を解決していく力や、人々の中に協働性を構築する力

番号	自己評価項目	自己評価 (A～D)
①	チームに参加できているか。	
②	チームの中で役割を自覚し、貢献しているか。	
③	チームをまとめる役割を担い、貢献しているか。	
④	チームと学校の教員、保護者や地域の人々など、様々な人々とつながりを見出し、学校の教育課題の解決に貢献しているか。	
(①～④の項目に対する自己評価の理由、根拠となる事実等の所見)		
⑤	協働力に関する自己の課題を改善できたか。	
(⑤に対する自己評価の理由、根拠となる事実等の所見)		

(3) 即応力

刻々と変わる教育現場の状況を即時に判断し、適切に対応しながら教育実践を展開していく力

番号	自己評価項目	自己評価 (A～D)
①	フィールドワークを通して自己の実践的課題を自覚できたか。	
②	フィールドワークを通して実践的課題の改善が図れたか。	
(①～②の項目に対する自己評価の理由、根拠となる事実等の所見)		
③	即応力に関する課題を改善できたか。	
(③に対する自己評価の理由、根拠となる事実等の所見)		

学校支援フィールドワーク報告書（現職大学院生）

【授業科目：学校支援フィールドワークⅠ（現職）】

所 属：
学籍番号：
氏 名：
実習校名：

実 習 期 間	年 月 日～ 年 月 日
実 習 時 間 数	時間

アドバイザー	
--------	--

学校支援フィールドワーク報告書（現職大学院生 M1）

○実習期間： 年 月 日 ～ 年 月 日

○自己評価の基準

A：十分にできている、B：概ねできている、C：あまりできていない、D：ほとんどできていない

※フィールドワーク計画表における目標を確認し、評価を記述すること

1 学校課題解決に対する活動の評価

番号	自己評価項目	自己評価 (A～D)
①	チームの研究課題は、学校の教育課題の十分な理解に基づいて設定されていたか。	
②	研究課題に迫るためのチームの活動計画は、具体的かつ実現可能なものであったか。	
③	チームの活動は、計画を踏まえて適切に実行に移すことができたか。	
④	チームの活動によって、チームの研究課題に迫ることができたか。	
⑤	結果として、チームの活動は、学校の教育課題の解決に寄与することができたか。	
(①～⑤の項目に対する自己評価の理由・根拠となる事実等の所見)		

2 実習者個人の目標に対する活動の評価

(1) 臨床力

学問知と実践知の動的なバランスを保持する力で、実践のただなかに身を置き、学問知を用いて教育実践の記録・分析を行い、それに基づいて実践知を組み替えていく力

番号	自己評価項目	自己評価 (A～D)
①	実践を主観的・感覚的に見取るのではなく、より客観的・具体的な事実として見取ることができているか。	
②	①のデータを学問知（理論的視点や実践研究の知見）に基づいて適切に解釈・分析・考察等できているか。	
③	②の結果から実践の改善案等を導くことができているか。	
④	①、②と③の往還を通して、新たな実践知（新たな理論的視点や実践研究の知見）を見いだすことができているか。	
⑤	他者が①～④ができるようにサポートすることができているか。	
(①～⑤の項目に対する自己評価の理由、根拠となる事実等の所見)		
⑥	臨床力に関する課題は明確に自覚されたか。	
(⑥に対する自己評価の理由、根拠となる事実等の所見)		

(2) 協働力

教員同士、保護者や地域の人々など、様々な人々とつながりを持ちつつ課題を解決していく力や、人々の中に協働性を構築する力

番号	自己評価項目	自己評価 (A～D)
①	チームに参加できているか。	
②	チームの中で役割を自覚し、貢献しているか。	
③	チームをまとめる役割を担い、貢献しているか。	
④	チームと学校の教員、保護者や地域の人々など、様々な人々とつながりを見出し、学校の教育課題の解決に貢献しているか。	
⑤	チームと学校の教員、保護者や地域の人々など、様々な人々との間に協働性を構築し、学校の教育課題の解決に貢献しているか。	
(①～⑤の項目に対する自己評価の理由、根拠となる事実等の所見)		
⑥	協働力に関する自己の課題を明確にできたか。	
(⑥に対する自己評価の理由、根拠となる事実等の所見)		

(3) 即応力

刻々と変わる教育現場の状況を即時に判断し、適切に対応しながら教育実践を展開していく力

番号	自己評価項目	自己評価 (A～D)
①	フィールドワークを通して自己の実践的課題を自覚できたか。	
②	実践的課題を克服するために何が必要かを認識できているか。	
(①～②の項目に対する自己評価の理由、根拠となる事実等の所見)		
③	即応力に関する課題は明確に自覚されたか。	
(③に対する自己評価の理由、根拠となる事実等の所見)		

学校支援フィールドワーク報告書（現職大学院生）

【授業科目：学校支援フィールドワークⅡ（現職）】

所 属：	
学籍番号：	
氏 名：	
実習校名：	

実 習 期 間	年 月 日～ 年 月 日
実 習 時 間 数	時間

アドバイザー	
--------	--

学校支援フィールドワーク報告書（現職大学院生 M2）

○実習期間： 年 月 日 ～ 年 月 日

○自己評価の基準

A：十分にできている、B：概ねできている、C：あまりできていない、D：ほとんどできていない

※フィールドワーク計画表における目標を確認し、評価を記述すること

1 学校課題解決に対する活動の評価

番号	自己評価項目	自己評価 (A～D)
①	チームの研究課題は、学校の教育課題の十分な理解に基づいて設定されていたか。	
②	研究課題に迫るためのチームの活動計画は、具体的かつ実現可能なものであったか。	
③	チームの活動は、計画を踏まえて適切に実行に移すことができたか。	
④	チームの活動によって、チームの研究課題に迫ることができたか。	
⑤	結果として、チームの活動は、学校の教育課題の解決に寄与することができたか。	
(①～⑤の項目に対する自己評価の理由・根拠となる事実等の所見)		

2 実習者個人の目標に対する活動の評価

(1) 臨床力

学問知と実践知の動的なバランスを保持する力で、実践のただなかに身を置き、学問知を用いて教育実践の記録・分析を行い、それに基づいて実践知を組み替えていく力

番号	自己評価項目	自己評価 (A～D)
①	実践を主観的・感覚的に見取るのではなく、より客観的・具体的な事実として見取ることができているか。	
②	①のデータを学問知（理論的視点や実践研究の知見）に基づいて適切に解釈・分析・考察等できているか。	
③	②の結果から実践の改善案等を導くことができているか。	
④	①、②と③の往還を通して、新たな実践知（新たな理論的視点や実践研究の知見）を見いだすことができているか。	
⑤	他者が①～④ができるようにサポートすることができているか。	
(①～⑤の項目に対する自己評価の理由、根拠となる事実等の所見)		
⑥	臨床力に関する課題を改善できたか。	
(⑥に対する自己評価の理由、根拠となる事実等の所見)		

(2) 協働力

教員同士、保護者や地域の人々など、様々な人々とつながりを持ちつつ課題を解決していく力や、人々の中に協働性を構築する力

番号	自己評価項目	自己評価 (A～D)
①	チームに参加できているか。	
②	チームの中で役割を自覚し、貢献しているか。	
③	チームをまとめる役割を担い、貢献しているか。	
④	チームと学校の教員、保護者や地域の人々など、様々な人々とつながりを見出し、学校の教育課題の解決に貢献しているか。	
⑤	チームと学校の教員、保護者や地域の人々など、様々な人々との間に協働性を構築し、学校の教育課題の解決に貢献しているか。	
(①～⑤の項目に対する自己評価の理由、根拠となる事実等の所見)		
⑥	協働力に関する自己の課題を改善できたか。	
(⑥に対する自己評価の理由、根拠となる事実等の所見)		

(3) 即応力

刻々と変わる教育現場の状況を即時に判断し、適切に対応しながら教育実践を展開していく力

番号	自己評価項目	自己評価 (A～D)
①	フィールドワークを通して自己の実践的課題を自覚できたか。	
②	実践的課題を克服するために何が必要かを認識できているか。	
(①～②の項目に対する自己評価の理由、根拠となる事実等の所見)		
③	即応力に関する課題を改善できたか。	
(③に対する自己評価の理由、根拠となる事実等の所見)		

学校支援フィールドワークの総合評価

授 業 科 目	学校支援フィールドワーク I 又は II (ストレート)		
実 習 校 名			
所 属 コ ー ス			
実 習 生 氏 名		学籍番号	

実習校の担当教諭によって、実習態度、実習の成果等が評価され、実習前の個別計画、実習後の報告・レポートにより評価をアドバイザーが行い、これらを総合的に評価する。次の各項目の点数の総計により S、A、B、C、D の 5 段階で評定する。

総合評価

評価科目	評価観点	配点	点数
1 学校課題 解決に対する 活動	・学校課題解決の計画策定とその実現可能性 ・学校課題解決推進の方略 ・具体的活動の展開 ・活動成果のとりまとめ	40	
2 実習者の 目標、目的、課 題	(臨床力に関して) ① 実践をより客観的・記述的な事実として見取る。 ② ①で得たデータを学問知に基づいて適切に解釈・分析・考察する。 ③ ②の結果から実践の改善案等を導く。 ④ ①、②と③の往還を通して、新たな実践知(新たな理論的視点や実践研究の知見)を見いだす。	20	
	(協働力に関して) ① チームに参加できている。 ② チームの中で役割を見だし、チームに貢献している。 ③ チームと学校の教員、保護者や地域の人々など、様々な人々とつながり、学校の教育課題解決に貢献している。	20	
	(即応力に関して) ① 教育現場の現状を理解している。 ② 学校の教育課題の解決のために、臨機応変に対応している。 ③ 臨床力・協働力を発揮して、チームで教育課題に対応している。	20	
合 計			
総 合 評 価			

特記事項

アドバイザー	
--------	--

学校支援フィールドワークの総合評価

授 業 科 目	学校支援フィールドワーク I 又は II (現職) (特別) (特別：教育経営)		
実 習 校 名			
所 属 コ ー ス			
実 習 生 氏 名		学籍番号	

実習校の担当教諭によって、実習態度、実習の成果等が評価され、実習前の個別計画、実習後の報告・レポートにより評価をアドバイザーが行い、これらを総合的に評価する。次の各項目の点数の総計により S、A、B、C、D の 5 段階で評定する。

総合評価

評価科目	評価観点	配点		点数
1 学校課題 解決に対する 活動	・学校課題解決の計画策定とその実現可能性 ・学校課題解決推進の方略 ・具体的活動の展開 ・活動成果のとりまとめ	個人	20	
		チーム	20	
2 実習者の 目標、目的、課 題	(臨床力に関して) ① 実践をより客観的・記述的な事実として見取る。 ② ①で得たデータを学問知に基づいて適切に解釈・分析・考察する。 ③ ②の結果から実践の改善案等を導く。 ④ ①、②と③の往還を通して、新たな実践知（新たな理論的視点や 実践研究の知見）を見いだす。	20		
	(協働力に関して) ① チームに参加できている。 ② チームの中で役割を見だし、チームに貢献している。 ③ チームと学校の教員、保護者や地域の人々など、様々な人々とな がり、学校の教育課題解決に貢献している。 ④ チームと学校の教員、保護者や地域の人々など、様々な人々との 間に協働性を構築し、学校の教育課題の解決に貢献している。	20		
	(即応力に関して) ① 教育現場の現状を理解している。 ② 学校の教育課題の解決のために、臨機応変に対応している。 ③ 臨床力・協働力を発揮して、チームで教育課題に対応している。	20		
合 計				
総 合 評 価				
特記事項				

アドバイザー